

宇都宮城下の商いと装い ～江戸時代のサステナブル・ファッション～

講師: 寺内由佳

江戸時代の宇都宮では、衣料品を扱う店が繁盛していました。

庶民は日常的に古着を着用したほか、結城紬や真岡木綿など、近隣で生産される織物も人気の商品でした。当時の人びとの衣生活を想像しながら、宇都宮から各地へひろがる商品流通のあり方も学びましょう。

1. 宇都宮城下の商い

「宇都宮町中諸職人諸商人留全」(寛政四年(1792))

商人・職人の数を町ごと・業種ごとに記した史料。

【下町(東側)の特徴】

- ・ 古くから発展していた町域。穀問屋など、藩から認められた専売権をもつ商人が集住。
 - ・ 六歳市が開かれた大町や新宿町、初市が開かれた上河原町あたりが中心。
 - ・ 穀物・魚・青物などの食料品、衣料品、日用雑貨など、商品の種類が豊富。
- 生活に密着した品を扱う商人が多い。=城下の人びとの生活物資と消費を支えた。

【上町(西側)の特徴】

- ・ 江戸時代になり、奥州街道・日光街道が整備されたときにととのえられた宿場町。
 - ・ 旅籠屋が集まっていた伝馬町・池上町を中心に、街道の追分(本郷町・小伝馬町)～材木町が繁栄。
 - ・ 宿場町としての機能が充実するにつれて、いろいろな商品を扱う店が増えていった。
- 街道を往来する武士や旅行者にむけた商売。

最も多い店は？ …古着屋！

- ・ 全 39 軒(史料中、最も多い)。cf.呉服屋 4 軒、太物屋 3 軒。
 - ・ 寺町に 15 軒、宮嶋町に 12 軒(大部分が地続きの二町に集中)。
- 他、隣接する千手町 3 軒、大工町 1 軒、杉原町 3 軒。上町では池上町 2 軒、本郷町 3 軒。
- 明神のすぐ東側となる四町の周辺部、とくに寺町・宮嶋町が古着商いの中心地。

ちなみに…

- 寛政期以降、古着屋は大体 40～50 軒ほどが営業。寺町・宮嶋町にはそれぞれ 20 軒ほど。
- 幕末に作成された商人番付の上位には、呉服商人と複数の古着商人が。
- 古着屋は数が多いのに繁盛していて、城下を代表するような富裕商人も。…古着＝かなり需要の高い商品

2. 江戸時代の衣服

【新品の織物】

呉服(絹織物)、太物(綿・麻など太い糸の織物)

→新品の着物(とくに呉服)は高額のため、庶民の大部分は古着を着用することが多かった。

【古着】

「払い物」(呉服屋の売れ残り品)、質流れ品、一般的な着古しの品、ところどころに目立つ傷のある品、「解き物」(着物を部分的に分けたもの)、「屑」(とくに質の悪い解き物)など。

→品質の幅が広く、値段も様々。

消費者のニーズに合わせて高級品から安物、粗悪品まで、それぞれの店で品揃えが異なる。

3. 古着仲間

- ・ 城下で古着屋を営むには、仲間に参加することが条件。
- ・ 宇都宮には古着問屋(卸売りに特化した商人)がない。＝相場がはっきりと決まっていない。
→古着の値段は、古着商人同士の取引のなかで、ひとつひとつ決められた。

☆宇都宮で売買された古着は、古着仲間のメンバーの商売勘によって価格設定が行われていた。

【仲間取引】(古着仲間のメンバー間でおこなわれる取引)

- ①仲間内の直接取引:メンバー同士で、それぞれが仕入れた古着を売買。
 - ・ 自分の店とは異なる品揃えの店から商品を仕入れる。
 - ・ 遠方へ仕入れに向くことが難しい者は、他の店に頼る。
→〈古着屋が仕入れにくる古着屋〉の存在。…仕入れの代行も。問屋的存在。
- ②質流れ品の糶:メンバーの誰かの店へ、質屋から質流れ品が持ち込まれたときに実施。
※古着屋と質屋の深い関わり
古着屋の仕入元は、各地の古着屋や質屋。質屋を兼業する古着屋も多い。

【質流れ品の古着にまつわる話】

丸井屋伊兵衛「嘉永七虎閏七月拾日夜着之中に金銀出候始末書」(嘉永七年(1854))

- ・ 丸伊の店へ、博労町の質屋・塚屋(篠原)友右衛門から、質流れ品の古着 140 点が持ち込まれる。
- ・ 糶を実施したものの高値でなかなか買い手がつかず、難航。→丸伊もいくつかの古着を落札。
- ・ 帰宅後、手元にのこった古着に値札を付けようとする、夜着に傷があることに気づいた。
このままでは売り物にならないので、解き物として売ることに。
- ・ 縫い目を解きはじめると、襟のあたりから紙包みが出てきた。→中には金銀合計 13 両ほどが入っていた。
- ・ 塚屋へ問い合わせると、夜着は博労町の茶屋・大隅屋与兵衛が養父から譲りうけ、後に質入れたものだと判明。
- ・ 丸伊のはからいにより、金銀は町奉行を通して元の持ち主(大隅屋与兵衛)へ返還された。
- ・ この一件は城下でたいへんな話題となり、記録にのこされた。

4. 宇都宮からひろがる古着の流通

(1)古着はどこからきてどこへ行く?

- ・ 江戸時代、古着の流通網は全国にくまなく展開。:大量の古着が、上方(主に大坂)や江戸から各地へ流通。
- ・ 江戸の古着問屋・古着市場には、関東・奥州の各地から古着商人が仕入れにやってきた。
→仕入れた古着を自分の店へ持ち帰った後、どのような取引が?
- ・ 宇都宮:中央市場＝江戸と、消費地＝奥州などの各地域をつなぐ、地方レベルでの集散地(中継地点)。

(2)実際の仕入れ・販売取引から

①丸井屋伊兵衛(宮嶋町)

- ・ 江戸での積極的な仕入れ:呉服・太物問屋とも取引。(呉服・太物の払い物＝売れ残り品を仕入れ?)
織物生産地で大量の仕入れ:足利・佐野・栃木、古河、～結城あたり。前貸しによる委託(仕入れ代行)も。
- ・ 販売先:今市～奥州南部(とくに、ある程度規模の大きな城下町や宿場)。在方との取引はない。

②沢屋宗右衛門(寺町)

- ・ 江戸を含め、他所での積極的な仕入れは確認されない。…主に宇都宮に滞在。
質屋を兼業:質流れになった古着を店で販売したと考えられる。近隣の農村から古着が持ち込まれることも。
- ・ 販売先:今市～奥州南部・仙台あたり、足利～結城あたり、現茨城県西部の農村まで、かなり広範囲。

☆宇都宮は単純な〈江戸と奥州の中継地〉ではなく、個々の商人によって、いろいろな地域とつながっていた。

5. 織物の生産と流通

(1) 生産地と庶民の需要

- ・全国各地で様々な織物(絹・木綿・麻など)が生産された。古来、近畿～東海地方が生産の中心地。
- ・江戸時代中期以降、関東では上州絹・秩父絹、武州青縞(木綿)、真岡木綿(晒木綿)、結城紬などが人気に。
- ・とくに日常着としての需要が高かったのは木綿織物、紬。

晒木綿: 白木綿(生木綿)に晒加工を施した綿布。下着や手拭いなどに利用。後染めで色・模様を付ける。

縞木綿: 先染めの糸で縞模様を織りだした綿布。種類が多く、「縞帳」などとよばれる柄見本帳も作られた。

紬: 紬糸(屑繭か真綿に繕いをかけて紡いだ糸)または玉糸(玉繭から紡いだ太くて節の多い糸)で織られた平織の絹布。

- ・江戸の木綿問屋仲間(白子組)による仕入れ: とくに享保期(1716-1736)～天保期(1830-1844)初め頃まで寛政元年(1789)、関東産木綿は合計 14.6 万反。その内、11.3 万反ほど(約 77%)が真岡木綿。

※真岡木綿: 下館・真壁周辺で生産された白木綿を加工した晒木綿。江戸から全国へ流通したといわれるが、実際は宇都宮も重要な集散地。奥州などへ、加工した染物なども「真岡木綿」として出荷。

6. 宇都宮の呉服商人

(1) 城下の呉服屋

- ・全体の軒数は少ないが、豪商の割合が高い。→京都を本拠とする商人も。
- ・最大の書き入れ時は明神の祭礼。さらに婚礼が数件あればかなりの利益。
- ・商品は絹織物だけでなく、木綿・麻などの各種織物と小間物。
→江戸から全国各地の織物を仕入れたが、真岡木綿や結城紬・結城縞などは生産地から直接仕入れ。

(2) 奈良屋(玉尾)与兵衛

- ・近江出身、京都に本店(仕入店)・宇都宮の日野町に出店。宇都宮城下では屈指の豪商として知られる。
- ・京都店は西陣織物を仕入れ。→宇都宮店へ送り、販売。
宇都宮店は江戸の呉服・木綿問屋と取引。周辺の生産地(関東一円～信州)から直接仕入れ。
- ・宇都宮店の取扱品: 結城紬・結城縞、真岡木綿、上田縞(紬)、奈良晒(麻)など。
→とくに結城紬・結城縞、真岡木綿は人気の高い主要商品。

(3) 宇都宮から奥州へ

- ・奥州の呉服屋は、木綿織物を大量に仕入れ。→結城縞・下妻縞(縞木綿)、真岡木綿(晒木綿・染物)など。
江戸の呉服問屋のほか、宇都宮の呉服屋も重要な仕入元。
- ・宇都宮の呉服商・佐野屋久右衛門から宮城白石の呉服(および古着)商・渡辺儀蔵への出荷品
「真岡晒」の他、「真岡」・「本真岡」の「浅色」・「茶帯」・「紺縞取」・「薄色」・「鉄色黒之両紺」など。
→呉服商人は、仕入れた白木綿を晒屋や紺屋へ渡し、仕上がった晒木綿や染物類を「真岡木綿」として販売。
(江戸時代、田川沿いで真岡木綿を染めたのが「宮染め」のルーツとされている)

☆織物生産地＝古着が発生しやすい地域。

規格外品や、質の劣る品(問屋・仲買が買い取らないもの)を保存しておき、古着商人へ売り払うことがある。

☆衣料品は、生産者の元から、各地の商人の手を介して消費者のもとへ届く。

存分に着用されたあと、古着としてさらに長く遠い流通の旅へ出発し、幾度となく人びとの生活を支えた。

〈参考文献〉

寺内由佳『近世の衣料品流通と商人—地方都市宇都宮を中心に—』(山川出版社、2022)